



福井県小浜市 高鳥 重郷

認定農業者

事例のポイント・要約

- ボカシとEM（有用微生物）を主に活用して土づくりを行う
- 水田 1.9haを経営、全耕地有機栽培を行っている

1. はじめに

家族の健康問題を始め環境問題、田畑の生き物を大切にする農業の必要性を感じると同時に農薬や、化学肥料に依存する現代農業に疑問を持ち平成5年に有機栽培を始める。

市内でEMを活用して自然農法栽培をしている方と「若狭有機会」を結成し、(財)自然農法国際研究開発センターで有機JASの認定をうけた。



2. 経営の概況

水稲耕作面積は186aで有機JASを取得している。労働力は家族2人で作業全般を行っている。主な出荷先は(株)ずいうんや個人販売を行っている。



若狭有機の会メンバーと

3. 栽培圃場の概要

1) 圃場の立地と周囲の地形

福井県南西部に位置し、古くから日本海側入口として盛え、奈良時代からの文化財も多く残るため、「海のある奈良」と言われている。都の色が濃い港町で、海産物を奈良や京都まで送った地域（御食国）の1つでもある。鯖の水揚げ基地ともなっており京都まで運ぶ鯖街道の起点となった。

2) 栽培条件

地質的には扇状地として形成されており、気候は日本海型の気象区分に属し、四季の移り変わりがはっきりしているとともに、冬季は、西高東低の冬型の気候であるが福井県の一番南に位置し京都や滋賀県に近く春は早く秋は一番遅くやってくる県内で一番温暖な地域である。

3) 圃場の課題と育土の方向

出来るだけほ場に入る回数を軽減したほ場管理を目指して取り組んできた。収穫後に耕起し冬期間は淡水し春はそのまま田植えをする耕種概要で継続してきた。ほ場はEMとEMボカシを中心に施用し、

出来るだけ自家製資材だけ使用し土壌の団粒化を進めたいと考えている。

4. 具体的な栽培技術

1) 耕起～作付けの準備

稲刈り後すぐに、稲ワラを全量ほ場に還元しほ場の地力に応じて発酵牛糞堆肥や米ぬか・油かすボカシを散布し耕起する。11月中旬から12月上旬にかけて代掻きを行い12月中旬には冬期淡水できるようにしている。

2) 播種・育苗～定植

栽培品種はコシヒカリが主で、種籾は自家採種で行っており、育苗用土は有機マットを使用して覆土に有機培土を使っている。

比重選は塩水を使用し比重1.13で行う。温湯処理は60℃で10分間浸種する。12日間浸種し、育苗は露地でプール育苗をする。育苗期間を約20日から25日とり田植え時には3.5葉で植付けを行う。

3) 播種・定植後の初期の管理

田植えは5月中旬に行う。条間30cmで、10a当たり20枚使用し50株/坪植付ける。

4) 雑草対策

今日までの取り組みでヒエなどの対策は出来てきたが、コナギが多く発生している所の稲株などに未熟有機物が残存していることが確認できた。未熟有機物を発酵分解させる作業や耕種体系を組む。

5) 中間～後期の管理

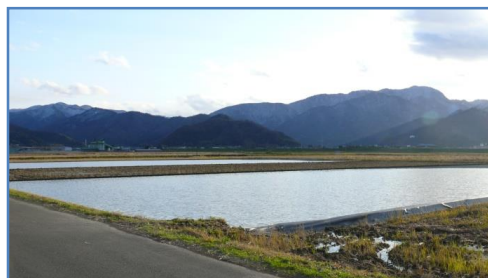
中間管理については、7月上旬に中干し、溝切りを行う。出穂は8月上旬、落水は8月末に行う。

6) 病害虫の管理と対策

特に対策として行っていない。

7) 収穫作業の手順と収穫後の調整・出荷基準等

稲刈りは9月中旬にできるだけ登熟したのを確認して行っている。収穫は稲刈りコンバインで行い乾燥、調整、色選を通して品質の向上を目指している。



春を待つ冬期間淡水した冬水たんぼ

5. 今後の課題や取り組みたいこと

- この地域にあったずんぐりむっくりの丈夫な健苗づくりに取り組む。
- コナギの発生が見えてきたので冬水たんぼと秋耕起、春代掻きの試験を始める。
- EM活性液の効果的な使い方を研究し品質の向上に取り組む。
- 今までは自分の都合に合わせた稲作りが主だったように思われる。これからは稲の整理に合わせた栽培管理に取り組んでいく。
- EM研究所の技術提携農家の認定を戴きましたので地域の自然農法や有機栽培の普及に使ってもらえるよう取り組んでいきたい。
- 家族始め顧客が安全で安心していただける農産物の生産しお届けする。

